審査をさせて頂きました、ピアニストの安達朋博です。

全国大会出場者の皆様お疲れさまでした。回を重ねるごとにどんどんレベルが上がっているコンクールで、今回も、もう一つ上のクラスに挑戦されても良いのでは、と思う出場者も多く、全ての部門とても聴きごたえのある充実した審査となりました。

まず大人部門についてですが、緊張されている方が多かったかと思いますが、弾くことに一生懸命になってしまい音に耳を傾けられなかった方も少なからずいらっしゃったと思います。
そのため、ペダルが濁っていることに気が付けずにいる方、そして弱音ができずに音楽が一辺倒であった方もおられました。
緊張して心拍数の上がる本番では、いつも通りと思っても速くなりがちになります。そんな中、明暗を分けたのは、自分のテンポであったかどうか、というところだったと思います。聞き覚えでテンポ設定をしてしまい、緊張も相まって速くなり指が浮いてしまい、バラバラになっていく。一方、自分の確固たるテンポをもって弾かれた方は安定していて、音色にも気を配れている方が多かったと思います。テンポが遅いのがいけないわけではありません、できるテンポで確実に弾くことも大事なことです。

続いて連弾部門ですが、なかなかハイレベルでした。

お二人で弾くということで、個々の持ち味を生かすことはとても良いことです。ただ、両者にとって中音域あたりがどうしても度々弾きづらい場所になってくるかと思いますが、タッチがぶれやすくなっているかなという印象でした。そして高音が埋もれてしまっているペアもいくつかありましたので、お二人で互いの音によく耳を傾け合ってみて下さい。
またお二人の打鍵のスピードが違うことが気になるペアもありました。打鍵の速い方と遅い方が同時に鍵盤を叩いても、音の立ち上がるスピードが異なってきてしまうので、合ってはいるのだけどそろっていない気がしてしまう…ということもあったかなと感じました。

最後にブルーメン部門ですが、今回は全国大会へ進まれたのはお一人だけでした。

課題曲はクロアチアの女性作曲家ドラ・ペヤチェヴィッチが作曲したとても愛らしい作品で、日本でも愛奏して下さる方がもっと増えてほしいと願っています。
個性的な演奏も楽しみですが、ペヤチェヴィッチの作品の特徴としては(曲によりますが)小まめに急な転調を繰り返して多彩に音楽が広がっていくところです。次回はもっと多くのかたに全国大会へ進んで頂くことを期待しています。